P1-066

あそびのボランティアによるオンライン訪問の可能性と課題

本田 睦子、下村 美紀、荻須 洋子
認定NPO法人難病のこども支援全国ネットワーク

【背景・目的】
すべての子どもにとって遊びは、成長・発達に必要で大切なものである。特に病児にとっては、治療や検査、制約の多い環境のもと苦痛や寂しさを軽減し、不足しがちな体験や社会性を促す機会となる。当会では子どもの心理や基礎的な知識、障害や病状に応じて遊びの工夫ができるボランティア（プレイリーダー）を養成し、病院等へ派遣している。2015 年からは、小児慢性特定疾病児童等自立支援事業を東京都より受託し、任意事業として遊びの訪問を実施し、療養中の家庭にもプレイリーダーを派遣し活動の広がりをみせている。その中、COVID-19 の影響を受け、通常の訪問の代替として、手作りおもちゃの発送や情報配信、web 訪問を行なった。コロナ禍 2 年が経過し、web 訪問では、分身ロボット「OriHime」を活用するなど広がりをみせたが、対象児と家族のニーズにマッチしているか、web 訪問の可能性と課題を検討する。
【方法】
コロナ禍の 2020 年度、2021 年度の遊びの訪問対象児に行なった活動、及び 2021 年度末に遊びの訪問対象児あてに行なったアンケートで検討を行なう。
【結果】
web 訪問件数は、2020 年度が 57 件、2021 年度 2 月末時点で 37 件であった。件数の減少については、就園・就学のため遊びの訪問を卒業した児もいたが、web 訪問にハードルを感じている児や家族もいることが示唆される。web 訪問は、今までの zoom の訪問の他に分身ロボット「OriHime」を活用するなど、訪問の幅を広げた。アンケート等の感想で「分身ロボットのお出掛けで、子どもが好奇心に満ちた表情をしていた」、「まるで子どもを連れて出掛けているようで嬉しかった」などの感想があり、web 訪問の新しい可能性を感じた。
【考察】
コロナ禍 2 年が経過し、制約が増えて閉塞感を感じる中、オンラインでつながり、会話できる環境の大切さをご家族の感想から伺うことができた。また、分身ロボット「OriHime」の活用により、外出体験や、発語が難しい児も分身ロボットでリアクションする事で自分の意思を伝えるなど可能性が広がり、経験を促すことができる。一方でオンラインが苦手と感じる方がいるなどの課題もある。オンラインの可能性を広げつつ、苦手な方を取り残さない工夫も加え、遊びを通して楽しい時間や安心感、つながりを病児と家族が感じられるような関係づくりを引き続き行なっていきたい。

P1-067

長引くコロナ禍で求められるピアサポート活動

下村 美紀、本田 睦子、福島 慎吾
認定NPO法人難病のこども支援全国ネットワーク

【目的】
当会のピアサポート活動は、難病や障害のある子どもを育てた経験のある親が行っている。同じ経験をしたなかま“ピア”として支援を必要としている人たちの話を傾聴し“共感と分かち合い”の気持ちで寄り添うことにより、その家族のエンパワーメントを支えてきた。2020 年より Covid-19 感染の蔓延防止が長期に求められ、収束が見えないまま社会全体に不安が増大する中、医療従事者はコロナ対応に手を取られているところも少なくない。よりピアサポートの支援が必要とされていることを相談者の声から明らかにし、よりニーズに沿った活動を継続することを目的とする。
【背景】
Covid-19 感染拡大により窓口での活動が制限され、相談の機会が著しく減少した。こども病院や小児科外来の一画にて活動を実施していることから、病院ごとに制限も異なる中、可能な範囲で活動を続けることとなった。病院外で待機する電話や SNS での相談も開始した。Zoom による交流会も実施し、ピアサポートの場を新たに設けるなど工夫する必要があった。
【研究方法】
主拠点 4 か所の 2021 年度通常の開設日数からコロナ禍の開設日数の比較。開設時間も短縮となりどれだけ相談の機会が減少したのかと、相談件数を集計。しばらく閉まっていた窓口が再開された後の相談者の声からどのような支援が求められていたのかを分析する。オンラインで開催された交流会の参加者の声も分析する。
【結果】
2021 年 4 月から 2022 年 2 月までの 4 拠点の活動予定日数としては① 145 日② 195 日③ 145 日④ 195 日の合計 680 日。コロナ禍活動日数① 15 日② 63 日③ 0 日④ 87 日の合計 165 日。相談件数① 29 件② 41 件③ 0 件④ 21 件。2021 年度交流会参加者全 2 回計 15 名。院内の相談から「病室まで来てもらうことはできないのか」交流会では「もっと早くこういう場に参加したかった」という声もあり、リーピーターもいた。電話での相談は活動日数 90 日、相談 23 件で、声だけのピアサポートの難しさを感じる結果となった。
【考察】
院内、電話、交流会では相談までに至る過程が異なり、後日開催の交流会ではより緊急性は低い。受診の流れで立ち寄れる場としてある院内窓口の存在は大きい。合わせて定期的に開催される交流会のような話ができる場、同じ仲間の話が聞ける場はコロナ禍にあっても閉ざされることなく開かれる必要がある事が示唆される。

Presented by Medical*Online